

## 『雑木林艦隊出動までの連合艦隊の混迷』

### ——総集篇の第二部

「松」以降、ようやく前線に参加できたこの雑木林艦隊は、それでも空母艦隊などとは違って、連合艦隊の一員としての期待を裏切ることにはなかったばかりか、むしろ予想以上だったのです。（後述）

ところが従来のどの戦史を調べてみても、伊集院大佐の事例と同様にその活躍を総括的にまとめた記録は残されていないのです。

これは或る意味で予期されていたことでした。何しろ戦後の日本の海軍研究者たちは、最も重要視しなければならぬ筈のこの「天王山」の最重要時期を見事に素通りしてしまっていたからです。

この結果、ガ島、キスカ島と並び三大撤収作戦と併称する価値のあるコロ島撤収作戦も、その立役者であった伊集院大佐・大田少将らのこの時期の殊勲者らの戦功も、一様に軽視ないし無視されてきました。

本稿が着手できたのは、ようやく2003年に当事者である種子島少佐の著書が刊行されたことと、米軍側がこの時期の海戦を特別に重視して、伊集院らの名と共に幾つかの重要史実を残していたからです。

カートホイール（車の両輪）作戦によって、ニューギニア戦線をマ将軍の陸軍に一任した米海軍は、ソロモン方面をハルゼーの海軍部隊が担当し、この方面は彼の海兵隊が単独で蛙飛び（リープフロッグ）作戦を展開。まずラバウル南方のブーゲンビル島に到着して、航空攻撃により日本軍のラバウル基地を無力化し、上陸作戦は放棄する作戦に転換していました。（これは戦後に明らかにされました）

日本軍がその作戦を看破できなかったのは迂闊と言えばその通りとしても、このことはむしろ米海軍が主導した連合軍側の基本戦略の卓越性を評価すべきものです。何しろその結果が「天王山」の名に相応しい致命的な打撃を日本軍に与えてしまったからです。

筆者がこの時期を以て太平洋戦争における真の意味での「天王山」と呼ぶのは、1582年のあの秀吉が明智光秀を山崎の合戦で撃破した天下分け目の戦いと対比できるからです。

あの戦いでは、秀吉と光秀という信長傘下の有力大名の二人が、どちらが先に諸大名を結集できるかが課題となり、その点では事件発生の本能寺のある京都に自らの軍勢を抱えていて、かつ明智一族や彼に近い大

名も地元に近い光秀が有利の筈でした。しかし秀吉が遠征先の備中の毛利勢との講和が成立したことにより、電光石火の「大返し」となり、光秀は諸大名の結集に遅れを取ってしまいます。

となると、秀吉よりも京都に近い光秀が、京都への進攻路に当たる山崎の地形を冷静に観察して、最も適切な防御陣地を構築し、まずは秀吉軍の攻撃を支え、その間に味方の結集を図るしかなかったのですが、その虚を突いた秀吉軍の先鋒部隊に最も見晴らしの良い天王山の高地を占拠されてしまいます。

天王山が要衝であるのを知った光秀が、自軍の主力を天王山に向けるか、大軍を移動できる主要道路に向かわせるか、迷いが生まれているうちに、秀吉軍が各方面で攻勢を開始し、たちまち光秀軍は全戦線で崩壊してしまつたのが真相でした。

これが歴史に残る「天王山」の由来です。こうして対比してみると、このソロモンの海域での戦いは、あたかも米海軍が日本の戦国時代の山崎合戦を研究した結果のようにさえ思える教訓を含んでいます。

ただ米海軍の作戦はさらに巧緻を極めていました。

まず事前の戦力漸減作戦が徹底しています。自軍の起動部隊の戦力を温存しながら、陸軍機を主体に日本軍の航空戦力と駆逐艦隊の損耗を図ります。これが最も頑強な抵抗戦力であるのを熟知していたのです。

こうして展開された消耗戦であり、この間に米軍は日本軍の行動の全容を正確に観察していました。この段階ですでに彼らは「天王山」を手中にしていたのです。次は機を見てさらに蛙飛びの拠点を次々に選び、このシステムを日本本土まで継続すれば良いのです。

米軍は圧倒的な数の陸軍航空部隊を投入して蛙飛び作戦を湯々と成功させ、たちまち拠点飛行場を建設してしまいます。それがコロ島やベラ・ラベラ島であり、次いで当面の目標であるラバウルの日本軍の根拠地に最も近いブーゲンビル島でした。

これは戦術的には極めて有効な作戦であり、日本軍に与えた恐怖感は想像を絶するものであります。

この作戦が順調に進められたならば、いつかラバウルの南方軍基地に敵軍が到達してしまう結果となります。

作戦の根拠地を失うという恐怖感が陸海の日本軍を支配し、無意識の

うちに受け身の姿勢となっていました。しかも兵員の数こそ多いものの制海権も制空権も失った孤立無縁の「孤軍」です。

こうして米軍は十万を越える日本軍の主力部隊をこの狐島に閉じ込めるのに成功しました。

この主力部隊を失ってしまった日本軍南方部隊には、もはや組織的抵抗力はありません。もちろんニューギニア戦線を支援するなどば不可能であるばかりか、最終的な比島戦線を展望した全南方戦線の事実上の崩壊です。正にあの四百年前と同じ「天下分け目の戦い」でした。

先に筆者は、戦後の軍令部関係者などによるマリアナ戦や比島沖海戦（いわゆるレイテ沖海戦）などの「たら、れば」論が、すべて空論に等しいことを敢えて強調してきましたが、その通りの事態が展開されていたのでした。

#### 天王山での日本軍の戦い方

四百年の時を経て二つの天王山を対比すると、それぞれの勝因と敗因は明快であり、しかも基本的に同一状況であるのが明らかです。

まず勝者側の事前の準備が万全でした。いち早く味方戦力の強化の手を打ち、その展開の速度も敗者側の予想を大きく越えています。最適の拠点の確保に至っては、敗者側となった日本軍との差は決定的です。

最終の決戦以前に勝敗は歴然としているのです。

すでに私たちは、南方前線の日本軍が急速に戦力を失ってきた事実をあらゆる部門で確認することができます。

基本的には総合国力の差が露呈し始めたことにあるのは自明ですが、問題なのはむしろその事実を正確に理解せず、独善的な作戦を立案し、徒に兵力を投入してきた中枢部門の責任であったのは明白です。

（この観点からすれば、海軍にも責任があるのは確かですが、それでもまだラバウル海軍航空隊などは、最後の一機が力の尽きるまで戦い続けました。決して無意味ということにはなりません。この辺りから陸軍も含めて、全くの徒死ではなく少しでも相手にも損害を与えて戦局に貢献しようという「玉碎」の思想が変貌し始めたと考えられます―後述）

既述の通り、陸軍機が洋上では全く機能できなかった歴史的事実は、最終に近い段階に至るまで修正は行われませんでした。もし実行されていたならば、ラバウルなどは最も陸軍機向きだったと思われる。上空

から俯瞰した地形は比較的単純だからです。

しかしとにかくすべてが負け戦（いくさ）を指向していたのです。

こうしてみると、従来の太平洋戦史でのコロ島周辺で展開された真の意味での天王山の戦いと、その後のラバウル攻防戦についての叙述は、余りにも表面的で、真実に遠いというしか表現しようがありません。

これには戦後の研究者とマスメディアに大きな責任があると思われるます。

例えば伊藤正徳氏の場合です。

戦後の早い時期に、その豊富な海軍知識と健筆によって、数多い優れた海軍史を披瀝している氏が、この重要テーマを意識的に回避しているのには、明白な理由が存在しているように思われます。

彼は自ら断言しているように、陸軍機は南方戦線では全く無力なのを熟知していて、彼が引用した数値は最初から海軍機のみです。彼の美学が陸軍機の存在自体を統計的にも拒否してしまっただからです。

これとは対照的なのが、魚雷における酸素魚雷に対する高い評価と、名駆逐艦「雪風」への傾倒です。あたかも彼は、当時のベストセラーである「連合艦隊の最後」でこの対比を鮮明にすることにより、かつて先人が「平家物語」を残したような、現代における栄光と死の物語を語り残そうとしたかのようなようです。

明らかにその意図は成功しています。多くの人が彼の論旨を歓迎し、これが完敗した筈の日本海軍の名誉を回復させてきたのは確かです。

また幾つかの特定の命題についての論証（例えば第一次ソロモン海戦など）では、他の論者の表面的で空疎な否定論を完全に圧倒する精緻な論証によって完全に論破し、圧巻の論文と評価することができます。

しかしその後の多くの論者の中には、伊藤正徳ほどの基礎知識のないままに、自分に都合の良い他者の議論を借用したり、全く寄せ集めの論旨を「編集」したりする例が続出しました。

特に目立つのが、昭和十八年夏の「天王山」以降に関しての諸論考です。これは伊藤正徳が、自らの太平洋海戦史から陸軍機の存在自体を抹殺してしまった時期でもあります。

これにより海軍史の論者の中でも屈指の実力者であった彼の論旨から昭和十八年夏の海戦史自体が消え、同時に、伊集院大佐も種子島少佐も陸戦隊の八連特司令の大田実少将も消え、戦後の誰一人としてこの時期

を語る人はなく、ましてこの時期をあゝの戦争の「天王山」と正しく評価する者も、事実上皆無となつてしまいました。

しかし間違いなくこの時の意味での戦局の決定的でした。

この時期に連合軍は対日本軍基本戦略を立案し、テストし、そして完璧に成功させました。(その後の実現状況もほぼ予定通りです。予定外は日本海軍の非常手段であつた特攻作戦です―次稿以降に再説)

明らかに、コロ島からベラ・ラベラ島に至り、ラバウルの前衛に当たるブーゲンビル島に巨大な前線飛行場を建設し、日本軍の最前線飛行場であつたラバウルを使用不能にしてしまつたこの作戦の成功は、正にこの雄大な日本征服の大作戦の第一歩でした。

すれ違つていた連合軍と日本軍の基礎作戦

どう考えても不可解なのは、戦後の戦史のすべてが、すでに明白となつているこの連合軍の基礎戦略を、完全に無視してしまつたことです。

この観点からすれば、ブーゲンビル島に四万近い陸上部隊を上陸させて、終戦まで悲惨な戦いを強いることもなく、そもそもラバウルの陸上部隊は何だつたのが問われなければならぬのです。

しかし当時の日本軍がこの事実を知らなかつたのは止むを得ないとしても、戦後の研究者も、当時の責任ある地位の人たちも、押し並べてほぼ完全にこの事実を無視しているのは納得できません。

基本作戦面のこの事実と、スプルーアンスの第五艦隊の温存作戦と、その第五艦隊の充実状況を総合すれば、翌昭和十九年二月十七日のトラック島日本軍基地への米軍機動部隊攻撃は、当然予期すべきでした。

昭和十九年に入り零戦が最後にラバウルを去ると共に、南太平洋のすべての海域は、ほぼ全域が米海軍の制空権下に入つていたからです。

それ以降の米軍進路もその流れに沿っています。戦後何十年も経た近年に至つてもなお、米軍の攻撃進路について日本側に迷いがあつたなどの議論に拘泥する論者のあるのは不可解です。迷いがあつたのは日本軍であり、日本軍のコロ島撤収作戦の予想外の健闘を切り抜けてからは、米軍はラバウルの日本軍航空隊の残存部隊を逐次損耗に追い込んでいたのです。こうして組織的抵抗は十一月中までとなり、早くも翌十二月には目に見えるほどに衰えていました。

もうこの時点で、米海軍は最終点までの日本海軍制圧の構図を描き終

えていたと思われます。当然、日本海軍の消滅は日本国の敗北です。

追いつめられた日本海軍

航空機も基地も失った日本海軍航空隊は、事実上壊滅してしまいました。戦後の論者の中には、まだ戦い続ける方法があったかのように主張する向きもありますが、納得できる論旨は皆無です。

例えば艦隊参謀の経験者であった某氏は、個々の戦いに対抗できる戦力が無い以上、極力残存部隊を温存して、これを決戦場に投入し、一気に局面の打開を図るという案があったことを、戦後に語っています。

しかしこれなどは、その後もしばしば登場する「乾坤一擲の決戦」と同様な精神論に過ぎず、何らの合理性もありません。

この天王山以降、合理性のある勝利の方程式はどこにも存在することはなかったのです。

意外にもここで登場したのは、これまで散々合理性のない作戦で海軍の足を引っ張るだけだった陸軍の司令官たちでした。これまでの陸軍は、兵員も武器も食料もすべての輸送を海軍に依存し、ついに貴重な戦力である駆逐艦まで引き出し、そして無残な消耗を強いていました。

ソロモンの後半戦の死闘がその非合理性を白日下に暴露し、すでにその犠牲対象は、海軍の基幹戦力まで消耗し尽くし始めていたのです。

ここで最後手段として選択されたのが、あの「戦鬪的玉砕」でした。

それはあのアッツ島玉砕のような、撤収困難な状況に追い込まれた部隊が「止むを得ず自決する」といういわば消極的自決であるのに対し、

「可能な限り敵に損害を与え、敵の進撃を遅らせるという、明確な目的を持つ玉砕作戦」でした。

続く

ペリリュー島防衛戦、硫黄島戦、沖縄戦、そのいずれもが同一の目的を持ち、同時に米軍を震撼させる大きな犠牲を彼らに与えました。

最終的な敗北は事実としても、この最後の悲壮な戦いだけは決してこれまでの陸軍と同一視はできないのは確かです。

いよいよ最後の海軍の戦いです。あの雑木林駆逐艦隊に最後の戦いの場は残されていたのでしょうか。次までお待ちください。

——以下続く